

「神はぼくのためにアメリカを

祝福してくれたのだろうか」

—Woody Guthrie's Influence on Bob Dylan—

三 浦 久

Woody's children と言われた多くの singer-songwriter の中で、Tom Paxton と Phil Ochs それに Bob Dylan が傑出している。Pete Seeger も “A generation of songwriters have learned from him — Bob Dylan, Tom Paxton, Phil Ochs and I guess many more to come.”¹ と述べている。

60年代初期にグリニッチヴィレッジで頭角を現したこの三人は、当然のことながら共通性も有しているが、それぞれが独自のスタイルを作り上げた。それは彼らに影響を与えたガスリーの持つ多面性によっている。ガスリーは同時に放浪者、吟遊詩人、作曲家、歌手、反逆者、労働運動活動家、政治評論家であり、体制側からは時には共産主義者であると見なされていた。

Tom Paxton は特に放浪者としてのガスリー及びガスリーの放浪の歌から多くの影響を受け “Rambling Boy” や “Can't Help But Wonder Where I'm Bound” 等の優れた旅の歌を数多く残した。Phil Ochs は、ガスリーの反体制的な作品から多くの影響を受け “I Ain't Marching Anymore” や “The War Is Over” 等の topical song を数多く書いた。その意味で確かに Paxton も Ochs もガスリーの子供ではあるが、その影響はかなり一面的であり、嫡子であるとは言いがたい。

ガスリーの持つ多くの要素を受け継いだのはディランであった。ガスリーは千曲以上の歌を書いたが、ディランの歌には、特に初期の作品には、ガスリーの様々な影響を見ることができる。歌の内容、歌い方、声、ギターの弾き方、

演奏スタイル（例えばトーキングブルース）等、何から何までディランはガスリーの模倣をした。ディラン自身次のように述べることによってガスリーへの熱狂的な傾倒を表した。“...there was a time when I did nothing but his songs...By this time I was completely taken over. By his spirit, or whatever. You could listen to his songs and actually learn how to live, or how to feel...I was like a Woody Guthrie jukebox.”²

1960年の12月にディランはミネアポリスを出発しシカゴ経由で翌年1月にニューヨークに着いた。すぐに彼は病氣療養中のガスリーを訪ねるようになる。ニュージャージー州のグリーンソン家で、ディランが初めてガスリーの前で歌った時、ガスリーは“He’s a talented boy. Gonna go far.”³と言ったといわれている。また同じ頃“Pete Seeger’s a singer of folk songs, not a folk singer. Jack Elliot is a singer of folk songs. But Bobby Dylan is a folk singer. Oh, Christ, he’s a folk singer all right.”⁴とも言ったといわれている。Seeger や Jack Elliot 等の多くの有名な folk singer たちが集まる中、ミネソタの田舎から着いたばかりの若干20歳の無名の若者に対してここまで言い切ることのできたガスリーの眼識の鋭さに驚かされる。ニューヨークの“Gerdes’ Folk City”でのデビューコンサートの時に着るように、Sid Gleason がガスリーの上着をディランに与えたと言われている。正にディランはガスリーの衣鉢を継いだのである。⁵

ガスリーがディランに影響を与えたという事実については多くのディラン研究者が言及している。この小論は Woody Guthrie が Bob Dylan 与えた影響がいかなるものであったかを考察しようとする試みである。

1

Bob Dylan が1965年の Newport Folk Festival でエレキギターを持って登場した時、聴衆が一斉に罵声を浴びせ、ディランが涙を浮かべながらステー

ジを下りたということは今や伝説である。5枚目のアルバム *Bringing It All Back Home* から彼も彼はバックバンドを使ったが、彼のハーモニカとアコースティックギターだけのパフォーマンスを好んでいた昔からのファンは、それをディランの裏切り行為であるとみなした。この激しい反応に対してディランは “It doesn't bother me...I can't keep painting the same picture...I know what I'm doing. I played rock and roll when I was thirteen.”⁶ と述べることによって、ロックは彼にとって新しいものではなく、むしろ原点への回帰であるということを示唆した。

Scaduto や Shelton の伝記から分かることは、ディランは高校時代に見た映画 *Blackboard Jungle* (邦題『暴力教室』) とその映画の中で使われた Bill Haley and His Comets の “Rock Around The Clock” に衝撃を受け、自らもバンドをつくり演奏を始めたということである。その映画を見た時、ディランは “Hey, that's our kind of music. That's written for us.” と叫んだと当時のクラスメートが証言しているし、⁷ ディランの最初のバンド the Golden Chords でドラムを担当していた Chuck Nara も “Of all the guys around who were playing, Bob was the only one with a specific goal in mind...He talked about having a group, and going somewhere with records.”⁸ とディランがロックンロールのスターになるという夢を口にしていたことを回想している。また “Girl From the North Country” のモデルであるといわれるディランの当時のガールフレンド Echo の母親は、ディランと友人 John Buckland について次のように述べている。 “They were always planning about being in the limelight, get all the world's attention, stuff like that. Elvis Presley — the idea was to be like him.”⁹ 当時ディランの回りにいた人達のこれらのいくつかの証言からも、1959年6月にヒビング高校を卒業した時に、ディランが yearbook に To Join Little Richard と記したという事実からも、¹⁰ この時期に彼がロックに傾倒していたということは明白である。だからディランの folk purist たちへの前述の反論はいわ

れないことではなかった。

それではディランはガスリーの歌といつどこで出会ったのだろうか。ディランは高校を卒業すると、ミネアポリスにあるミネソタ大学の liberal arts college (教養学部) に進学した。大学で学ぶためというよりも田舎町ヒビングから出るための一つの方法であったようである。¹¹ 結局ディランは6カ月で大学へ行かなくなる。なぜなら「大学と養老院は同じだ。養老院よりも大学での方が多くの人が死ぬという違いはあるけれども」(Colleges are like old-age homes; except for the fact that more people die in college than in old-age homes, there's no difference.)¹² と感じていたからである。Scaduto によれば、ディランは1959年9月にミネアポリスに着き、大学生活を始め、翌月の10月のうちに、大学の近くのミネソタのグリニッチヴィレッジともいえるディンキータウンにあるその年の秋にオープンした Ten O'Clock Scholar というコーヒーハウスに現れ “Do you mind if I play? I want to be a folk singer.” とオーナーの David Lee に頼んだということである。¹³ rock'n'roll のスターになることを夢見ていたディランが、突然に僅か一、二カ月で folk singer になりたいと思うようになった背景には何があったのだろうか。Bob Spitz はそれをアメリカにおけるロックミュージックの衰退と、保守的な50年代(型にはまった価値観をもった親たちやマッカーシズム) に対する大学生や知識人たちの抵抗としての folk song の復興に帰している。¹⁴

Elvis Presley は退役後、ハリウッド製の無意味な映画に出演するようになり、Buddy Holly は飛行機事故で死に、Little Richard は牧師になるために音楽から離れ、Gene Vincent はイギリスに移り、当時のアメリカのロックは危機を迎えていた。ポピュラー音楽の主流は Frankie Avalon, Bobby Darin, Ricky Nelson それに Paul Anka 等の甘いマスクと声をフィーチャーした毒にも薬にもならないティーンエイジャーの女の子むけの音楽だった。ディランがその種の音楽に満足できなかったと想像することは難しいことではない。当時ミネソタ大学のみならず、アメリカの各地の大学の周りにはコーヒーハウス

が毎日のようにオープンしていたが、そこに集まる人たちはビートニック、絵描き、詩人、「知識人」、そしてそれらの風変わりな連中に共鳴した学生たちであった。彼らは the House Un-American Activities Committee (下院非米活動委員会) から喚問され共産主義の支援者であるとブラックリストに載せられていた Weavers と Pete Seeger に、そして彼らのレパートリーの中の多くの歌を書いていた Woody Guthrie に深い関心を抱いていた。

このような雰囲気の中で、ディランは極めて短時間のうちに folk singer に変身する。1959年12月、クリスマス休暇でヒビングに戻った時、彼は旧友の John Bucklen に “I'm a folksinger now. Electric guitars are not in anymore.” と話し、新しいアコースティックギターとハーモニカホルダーを見せたということである。そしてその休暇から戻ってから、僅かではあるが初めてギャラをもらって「プロ」の folk singer として Ten O'Clock Scholar のステージに立ったのである。¹⁵

この時点においては、ディランの folk singer への変身は、Spitz が考えるほど確信に満ちたものではなかったように思われる。1965年にニューヨークで「フォークミュージックに興味を持ったのは、とにかく世に出たかったからだ」(I became interested in folk music because I had to make it somehow.)¹⁶ と語っているが、本心ではなかったろうか。Dinkytown では rock'n'roll は時代遅れであり、musician として認められるためには好むと好まざるにかかわらず、folk singer になる必要があったのである。

その頃、その後のディランの方向を決定づける大きな出来事がおこる。それは Woody Guthrie の書いた *Bound For Glory* という本との出会いである。時代の雰囲気に合わせるかのように folk singer の道を歩み始めたディランは、この一冊の本と出会うことによって、自らの進むべき道を確信するのである。ディランはガスリーの歌をこの本を読む以前にも聞いたり歌ったりしていただろうが、この本を読んだ後は、彼自身が述べているように「ウディ・ガスリー・ジュークボックス」になり四六時中ガスリーに没頭するようになるのである。

Bound For Glory を初めて読んだ時のことをディランは次のように回想する。“...And I read his book. I read *Bound For Glory* which a folk music professor at the University of Minnesota loaned to me to read — because it was not the kind of book that they sold in a bookstore. I thought *Bound For Glory* was the first *On the Road*, and of course it changed my life like it changed everyone else's.”¹⁷ この本を読む前にすでにディランはガスリーの歌を歌うようになっていたが、人生が変わってしまうような衝撃を受けたのは *Bound For Glory* を読んでからだということがわかる。

Scaduto によれば、ディランにこの本を読むように勧めたのは、David Whitaker という Dinkytown に住むボヘミアンである。彼らは図書館やいくつもの書店でその本を探したが見つからず、数日後、ミネソタ大学の教員 (a University faculty member) である Harry Weber が一冊持っていることをつきとめ、Whitaker がディランのために借りに行ったのである。ディランがその本を読んだ時の反応を、近くにいた Hugh Brown は次のように述べている。“He was just amazed by it. He fell in love with Woody Guthrie right away.” そしてディランはその本をその後何週間も持ち歩き、会う人毎にその本の一節を読んで聞かせたのである。さらに彼はガスリーが『怒りの葡萄』を基にして書いた “Tom Joad” という長い歌のレコードに来る日も来る日も耳を傾けたのである。¹⁸ それまではディランの folk music への転向は便宜的なものであったかもしれないが、ここにおいて自らの進むべき方向を確信したのである。

Shelton は *No Direction Home* の中で、ディランにとって *Bound for Glory* の発見はまるで聖書を発見したかのような体験であると述べ、さらに当時のディランの友人 Harvey Abrams の言葉を引用し、彼の熱狂ぶりを伝えている。“The book came as a real shock. For the next two years he

patterned his life after what he had read. Bob started doing everything the way Guthrie did. For many months thereafter, everything Bob sang sounded like Guthrie. He became very good at singing just like Woody.”¹⁹ Shelton は、ここではその本の所有者については、“Bob borrowed Weber’s copy.” と簡潔に述べているに過ぎないが、他のところで、Harry Weber は “a Ph.D. candidate in Latin literature and a ballad scholar” であると説明している。²⁰

Bob Spitz はディランは “a whacked-out college professor” から “an old edition of *Bound for Glory*” を借りたが、それを読んで彼は Woody Guthrie の中に神を見いだした、と述べている。²¹

Harry Weber については、4人が異なる肩書を与えている (Dylan — a folk music professor; Scaduto — a University faculty member; Shelton — a Ph.D. candidate in Latin literature and a ballad scholar; Spitz — a whacked-out college professor) が、これらを総合して考えてみると、彼は当時ミネソタ大学の博士課程の大学院生で、中南米文学か、ballad 等の folk music についての講義を受け持っていたか、あるいは teaching assistant として学生を教え、faculty の一員であると考えられていたかである。しかし重要なことは彼が何をしていたかではなく、図書館にも書店にもなかった1943年に出版されたこの本を持っていたということである。この時にこの場所で *Bound for Glory* に出会っていなかったならば恐らくディランは異なる道を歩んでいたことだろう。

Bound for Glory は、1942年、ガスリーが30歳の時に書いた自叙伝である。ディランはこの本のどこに魅了されたのだろうか。まず第一に言えることは、ディランはこの本の中に描かれている、アメリカ中を放浪しながら、抑圧されている人たちのために歌を歌って歩いたガスリーに自らを投影したということである。

Bound for Glory は、ガスリーがギターを背負いながら貨物列車で、しか

も屋根のついていない車両 (flat wheeler) に乗って様々な皮膚の色をした人々と旅をしているシーンから始まる。冒頭から数ページ目のところでディランが生まれた町 Duluth の名前が登場する。“A red-eyed vino drunkard took a man by the feet and pulled him along the deck to the door. ‘My buddy. Ain’t said a word since I loaded ‘im in last night in Duluth...’”²² またその章の最後の部分でも、ミネソタ大学のある the Twin Cities のひとつ、St. Paul の名前が挙げられる。“Can I remember? Remember back to where I was this morning? St. Paul. Yes. The morning before? Bismarck, North Dakota...”²³ *Bound for Glory* を読んだ時、ディランは “And ya know what, hey? That freight was rolling right through Minnesota at that time. Woody was comin’ right through here. Wild!”²⁴ と友だちに興奮して語ったということであるが、身近な町の名前が出てくることによって、自らをガスリーと同一視することはより容易になったに違いない。

2章からは子供時代を過ごしたオクラホマ州 Okemah での様々な、大部分は不幸なエピソードが語られる。13章からは、15歳になったガスリーの砂嵐からのカリフォルニアへの逃避行と、そこでの【怒りの葡萄】の Tom Joad さんながらの生活が描かれ、最後の19章は、再び冒頭の貨物列車のシーンで終わっている。これらのエピソードがディランに与えた影響は、*LYRICS 1962 - 1985* の前半に収められているディランの歌以外の文章 (詩) に顕著である。

“My Life in a Stolen Moment” は、詩の形で自らの半生を語ったディランの “Bound for Glory” である。その中で彼は自らを「放浪者」に仕立て上げるために多くの言葉を使っている。“... I ran away from it (Hibbing) when I was 10, 12, 13, 15, 15 1/2, 17, an’ 18 / I been caught an’ brought back all but once... / ...I’s driftin’ an’ learnin’ new lessons / I was making my own depression / I rode freight trains for kicks / An’ got beat up for laughs / Cut grass for quarters...” “11 Outlined Epitaphs” でも「放浪者」であることが強調される。“...but I was young / an’ só I

ran / an' kept runnin'... / I am still runnin' I guess / but my road has seen many changes / for I've served my time as a refugee / in mental terms an' in physical terms / ..." その真偽はさておき、ディランは放浪者としてのガスリーに自らを投影したのである。

さらに重要なことは、ディランは *Bound for Glory* におけるガスリーの考え方、ものの見方から多くを学んだということである。通読してわかることはガスリーは常に弱いもの、抑圧されているものの側に自らを置いているということである。そして必要とあらば権力や体制に対して抵抗することを厭わない。その一つの例が16章に描かれている。

1941年の12月、パールハーバーを日本軍が奇襲攻撃した数日後の雨の夜、ガスリーが友人のフォークシンガー、Cisco Houston とロサンゼルス Skid Row (どや街) の酒場で歌っていると、外でガラス窓が割れる音が聞こえてきた。暴徒が日本人の家族が経営している隣の店を襲ったのである。二人が外に飛び出すと、暴徒は口々に、“Jap rats!” “Spies! They tipped off th' Goddam Jap army!” “Git 'em! Kill them!” 等と叫んでいる。この日本人の経営者をよく知っていた Cisco は暴徒の前に立ちほだかり、「俺はこの縁石のところに立って、お前たちを中には入れない。絶対動かない」 (“Me, I'm going to stand right here, right here on this curb. I just ain't moving.”) と叫ぶ。何人かの人たちも Cisco に味方し、暴徒が日本人の店に入れないうに彼の横に並ぶ。その時ガスリーは、ギターを取って歌いだす。

We will fight together	みんな一緒に戦おう
We shall not be moved	絶対ここを動かない
We will fight together	みんな一緒に戦おう
We shall not be moved	絶対ここを動かない
Just like a tree	川のほとりに立ってる
That's planted by the water	一本の木のように

We	絶対
Shall not	ここを
Be moved.	動かない

Cisco もギターをつかみ、「みんなも歌おう」(“Everybody sing!”) と叫んだ。ガスリーも「さあ、みんな一緒に! できるだけ大声で歌おう」(“All together! Sing! Give it all ya got!”) と叫ぶ。彼らは暴徒の前で一緒に歌いだした。

“Just like / A treeeee / Standing by / The waterrr / We / Shall not / Be / Moooooved!” 騒ぎを聞きつけ外に出て来た人たちがさらに歌に加わり、激しく降る雨の中、歌声は Skid Row の「グランドキャニオンに鳴り響く教会の鐘の音のように」響きわたった。暴徒は悪態をつきながら中に押し入ろうとするが、歌声に圧倒されて入れない。そのうちに三々五々こそこそとどこかへ消えてしまった。最後に残っていた四、五人の「ゴリラのように」獐猛そうな連中も遠くのほうでパトカーのサイレンが聞こえると、蜘蛛の子を散らすようにどこかへ消えてしまった。

Bound for Glory の中のこのようなエピソードやガスリーの歌から、ディランは彼が今まで歌っていたロックンロールの歌詞とは違う世界を学んだに違いない。ディランの初期の作品には、弱者や抑圧されている者たちの立場に自らを置いて書かれた歌が極めて多いのである。

3

ガスリーと共に歌いながら旅をし、多くを学んだ Pete Seeger は、「ウディから教わったことのなかでも、最も貴重なものは、彼の正邪、善悪の意識、はっきりとものを言う率直さ、それに、世の中の一生懸命に働いている人たちと自分とを同一視する強力な意識だった」¹⁸ と述べているが、見事にガスリーの作品の本質をとらえている。そしてディランの初期の作品、少なくとも3枚目の

アルバム *Times, They Are A-Changing* までの多くの作品の根底にも、「正邪、善悪の意識、はっきりとものを言う率直さ、それに、世の中の一生懸命に働いている人たちと自分とを同一視する強力な意識」が横たわっていると言うことができる。

ガスリーが書いたほとんどすべての歌の中に、彼のそのような意識を見ることができる。例えば、“Deportee” は安い賃金で働かされたメキシコ人の不法労働者たちが乗っていた飛行機が、メキシコのロスガトスで墜落したという新聞の記事を読んで書いたものである。新聞は死んだメキシコ人労働者の名前を掲載せず、ただ deportees (追放者) と書いただけであった。その 3rd verse は次のようである—

Some of us are illegal and some are not wanted
Our work contract's out and we have to move on
Six hundred miles to the Mexican border
They chase us like outlaws, like rustlers, like thieves

俺たちには密入国者もいれば、白い目で見られている者もいる
仕事の契約が切れ、出て行かなければならない
メキシコ国境まで600マイル
まるで無法者や牛泥棒や窃盗犯のように追われて

そしてこの後に chorus がつづく。“Good-bye to my Juan, good-bye Rosalita / Adios, mis amigo Jesus, Maria / You won't have a name when you ride the big airplane / And all they will call you will be / deportee” (さよならフワン、さよならロザリータ / さよなら、ぼくの友だち、ヘイサスにマリア / 飛行機に乗っても君たちは名前でもらえない / ただ追放者と呼ばれるだけ)²⁸

これは弱者の側に立って考えるガスリーのスタンスがよくわかる歌であるが、通常はアメリカ讃歌であると考えられている彼の代表作の一つである “This Land Is Your Land” も、original manuscript では、アメリカ批判の歌になっている。Tim Riley は、彼の著書 *Hard Rain* の中で “This Land Is Your Land” は、空々しいほどにアメリカを賞賛している Irving Berlin の “God Bless America” に対抗して書かれたと述べている。²⁷

Edward Robi の *Woody Guthrie And Me - An Intimate Reminiscence* (邦題【わが心のウディ・ガスリー】) の中に、この歌の original manuscript のコピーが掲載されている。²⁸ それによると、chorus および verse の最後の一行は “This land was made for you and me” ではなく “God blessed America for me” になっている。つまり chorus の部分はずぎのようである—

This land is your land, this land is my land
From California to the New York island
From the Redwood Forest to the Gulf stream waters
God blessed America for me

この国はあなたの国、この国はほくの国
カルフォルニアからニューヨークまで
レッドウツの森からメキシコ湾流まで
神はほくのためにアメリカを祝福してくれた

これだけでは Berlin の歌に対抗しているようには見えないが、最後の verse にオチが潜んでいる—

One bright sunny morning, in the shadow of the steeple
By the Relieve Office I saw my people

As they stood hungry, I stood there wondering if
God blessed America for me

ある晴れた朝、尖塔の影の中
貧民救済事務所の近くで、ぼくは見たんだ
お腹を空かせている人たちを、そしてぼくは思った
神はぼくのためにアメリカを祝福してくれたのだろうか

この歌は、最後の行が “This land was made for you and me” (この国はあなたとぼくのためにつくられた) に変えられ、体制批判的な歌詞を全部省いて、アメリカの美しさ、広大さが歌われている部分の 3 verses だけで50年代、Weavers がヒットさせ、その後多くのグループが取り上げたために、アメリカ讃歌であると考えられているが、ガスリーの真意ではない。この歌の彼の真意は Weavers が歌わなかった次の verse にある――

Nobody living can ever stop me
As I go walking that freedom highway
Nobody living can make me turn back
This land was made for you and me²⁹

誰もぼくを止めることはできない
ぼくがこの自由の道を歩いていく時
誰もぼくを引き返させることはできない
この国はあなたとぼくのためにつくられたのだから

ガスリーは、大恐慌と砂嵐、そして労働組合運動の黎明期である30年代から50年代にかけて、ディランは公民権運動、冷戦、ベトナム戦争の60年代に、多く

の歌を書いた。当然彼らが歌った内容、対象は異なっている。しかし、二人の歌の根底にある精神は同じである。それは「正邪、善悪の意識、はっきりものを言う率直さ、それに、世の中の一生懸命に働いている人たちと自分を同一視する強力な意識」である。

4

ディランのデビューアルバム *Bob Dylan* には13曲収められているが、わずか2曲だけがディランの作品である。残りの11曲はトラディショナルと何人かのブルーズマンの作品であり、ガスリーの作品は取り上げられていない。しかしディランが書いた2曲は共にガスリーの影響が濃厚である。

“Talking New York” はガスリーが好んで使ったトーキングブルース（例えば “Talking Dust Bowl Blues”）のスタイルを踏襲して書かれた歌で、アルバムの二番目に入れられている。ディランがミネソタから冬のニューヨークへ出て来て、歌の仕事を得ようとして苦勞する話である。ほうほう歩き回り、ようやく仕事が見つかる。

Well, I got a harmonica job, begun to play
Blowin' my lungs out for a dollar a day

ハーモニカを吹く仕事が見つかり、働き始めた
肺が飛び出るくらい吹いて、わずか一日一ドル

この部分が、ガスリーの有名な歌の一つ “Hard Travelin'” に “Cuttin' that wheat stackin' that hay / And I'm tryin' to make about a dollar a day” (小麦を刈り、干し草つんで / それでようやく一日一ドル)³⁰ から来ていることは一目瞭然であろう。

さらにこの歌の最後の方で、ガスリーに言及するところがある。

Now, a very great man once said
That some people rob you with a fountain pen
It didn't take too long to find out
Just what he was talkin' about

とても偉大な人が言ったことがある
万年筆で盗みを働く奴がいるってね
長くはかからなかったよ
彼の言ってることがわかるまで

「とても偉大な人」とはガスリーのことである。彼の “Pretty Boy Floyd” の中に “Some will rob you with a six gun / And some with a fountain pen” (六連発の拳銃で盗みを働く奴もいれば / 万年筆で盗む奴もいる)³¹ というところがある。

アルバムに入られているディランの書いたもう一つは “Song to Woody” で、ガスリーに対する思いが切々と歌われている。その 3rd verse を次に引用してみよう。

Hey, Woody Guthrie, but I know that you know
All the things that I'm a-sayin' an' a-many times more
I'm a-singin' you the song, but I can't sing enough
'Cause there's not many men that done the things that you've done

ねえ、ガスリーさん、ぼくにはわかっています
ぼくが言ってる何倍ものことをあなたが知ってるってことを

あなたのために歌ってるんですが、思いの半分も歌えません
あなたがしたようなことをした人はそれほど多くはないんですから

ディランのガスリーへの熱い思いがよく伝わってくる。最後の verse には、
ガスリーの歌からの一節が織り込まれている。

I'm a-leavin' tomorrow, but I could leave today
Somewhere down the road someday
The very last thing that I'd want to do
Is to say I've been hittin' some hard travelin' too

明日旅に出ます、今日出ることだってできます
いつの日かどこかの道を歩いている時
絶対にしたくないことは
ばくもあなたのように辛い旅をしてきたと言うことです

前述の “Hard Travelin'” の最後の verse の最後の一行、“I've been hittin' some hard travelin', lord”（主よ、私は辛い旅をしてきました）が使われていることは言うまでもない。引用したこの二つの verse から感じられることは、ガスリーに対するディランの控えめで謙虚な姿勢である。ガスリーに憧れ、ガスリーを模倣し、「ガスリーのジュークボックスだった」と自認していたにもかかわらず、ディランは、自らをガスリーと、そして彼と共に旅をした「シスコヤソニーやレッドベリー」と同列に置くほど不遜ではないと言っているかのようだ。

“Song to Woody” に関してもう一つ付け加えておくべきことは、Shelton も指摘しているように、ガスリーの “1913 Massacre” のメロディが使われているということである。²

Pete Seeger は、「ウディの歌はとでもシンプルだった。... 複雑な歌を書くのは誰にでもできるが、シンプリシティを達成できるのは天才だけだ」³³ と言っているが、ディランの歌は、特に4枚目のアルバム *Another Side of Bob Dylan* 以後はシンプリシティからはほど遠いものになって行く。そのようになる過程には様々な要因が含まれている。Ginsberg 等の詩人の影響もあるし、ケネディー大統領の暗殺されたことによって、白黒のはっきりした、名指しで相手を糾弾するような歌が書きづらくなったということもある。さらに、ディラン自身、ガスリーの影から離れたと思っていたようでもある。

ロックに転向したということで糾弾された時、ディランは次のように語っている。「ほくはフォークミュージックが何であるかわかっている。だからほくは自分のことをフォークシンガーとは呼ばないんだ。... みんな、普通の人たちが理解できるようにフォークはシンプルであるべきだと言う。誰かを普通の人なんて呼ぶのは無礼だとは思わないかい。... 彼らは30年代の歌や労働組合の歌が聞きたいんだ」³⁴ 明らかに、この発言は Pete Seeger の前述の発言やガスリーの歌を意識している。

この頃からディランはこの小論の冒頭でも触れたようにロックの世界に回帰し、優れたアルバムを立て続けにリリースする。しかし、その言葉、内容は、彼が高校生の際に演奏していたロックンロールとはかけ離れている。もとの世界へただ戻ったわけではないのである。人はそれをフォークロックと呼んだ。ガスリーの影響によって自らの進むべき方向を確信したディランは数多くの優れたフォークソングを書いた。しかし、次の段階へ到達するためには、それを否定することが必要だったのである。

映画 *Field of Dreams* に見られるように、最近のアメリカの大衆文化の中には「父との和解」³⁵ のテーマがいたるところに見られるが、ディランとガスリー、あるいはディランとフォークミュージックの関係についても同じことが

言えるように思われる。1992年10月に、ニューヨークの Madison Square Garden で行われたディランのデビュー30周年を記念するコンサートで、ディランは本当に久振りに“Song to Woody” をアコースティックギター一本で歌ったのである。そして彼の最も新しい二枚のアルバム *Good as I Been to You*⁶ と *World Gone Wrong*⁷ はいずれもアコースティックギター一本でトラディショナルなフォークソングを歌っている。

レイ・キンセラが「夢の球場」を作ることによって一度は否定した「父」と再び出会ったように、ディランもまた、30年の年月をこえて、「神」のように崇め、そして否定したフォークの「父」と再会したのではないだろうか。

注

All lyrics by Bob Dylan in this paper are quoted from *Lyrics, 1962 - 1985* (Alfred A. Knopf, New York, 1985) only as necessary in the context of critical analysis.

1. Guthrie, Woody, *Bound for Glory*, (Plume, New York, 1983), p. ix
2. The booklet to the CD, *A TRIBUTE TO WOODY GUTHRIE AND LEADBELLY*, (SONY RECORDS 25DP 5219), p. 8
3. Scaduto, Anthony, *Bob Dylan*, (Sphere Books, London, 1972), p. 56
4. *Ibid.*, p. 56
5. *Ibid.*, p. 75
6. McGregor, Craig ed., *Bob Dylan, A Retrospective*, (William Morrow & Company, New York, 1972), p. 101
7. Scaduto, p. 6
8. *Ibid.*, p. 11
9. *Ibid.*, p. 19
10. *Ibid.*, p. 25
11. Spitz, Bob, *Dylan, A Biography*, (Penguin Group, London, 1989), p. 70

12. McGregor, p. 139
13. Scaduto, p. 27
14. Spitz, pp. 75-81
15. Ibid., p. 83
16. Miles ed., *Bob Dylan In His Own Words*, (Omnibus Press, London, 1978), p. 46
17. *TRIBUTE*, P. 8
18. Scaduto, pp. 39-40
19. Shelton, Robert, *No Direction Home*, (New English Library, London, 1986), pp. 74-75
20. Ibid., p. 66
21. Spitz, p. 95
22. Guthrie, p. 24
23. Ibid., p. 36
24. Scaduto, p. 40
25. Guthrie, Woody, *Dust Bowl Ballads*, RCA EGR-3009
26. Seeger, Pete & Reiser, Bob, *Carry It On*, (Sing Out, Pennsylvania, 1991), pp. 209-211
27. Riley, Tim, *Hard Rain*, (Knopf, New York, 1992), p. 45
28. エド・ロビン著 矢沢寛訳『わが心のウディ・ガスリー』（社会思想社、東京） p. 165
29. Seeger & Reiser, p. 162
30. Guthrie, Woody, *Columbia River Collection*, SHINSEIDO SC-2113
31. RCA EGR-3009
32. Shelton, p. 163
33. Guthrie, *Bound for Glory*, pp. vii-viii
34. Scaduto, p. 218

35. 信州豊南女子短期大学紀要 vol. 10 「とうもろこし畑でつかまえて」
- *Field of Dreams* と *Bruce Springsteen* -, pp. 25-45 参照
36. Dylan, Bob, *Good As I Been To You*, SONY RECORDS SRCS 6580
37. Dylan, Bob, *World Gone Wrong*, SONY RECORDS SRCS 6876 56